

第17回地域医療現地研究会に参加して 「地域包括ケアとまちづくり」

<岡山県・矢掛町／川上町>

国診協地域医療・学術部会委員／千葉県・鋸南町国保鋸南病院長

金親正敏

第17回地域医療現地研究会は平成15年5月22日、23日の両日、岡山県において、県内の16国保病院、24国保診療所の協力で、北は北海道から南は鹿児島まで約270名の参加を得て盛大に開催された。

本年から、これまでの秋の開催が5月となり、前回の長崎県・平戸市での開催後6か月で準備をされた熊山町国保町立熊山病院の院長、内藤紘彦先生はじめ岡山県の国保関係者のみなさんのご苦勞がしのばれる。

岡山県では、大和と並び立つ「古代吉備のくに」と呼ばれる古くからの伝統、文化を大切に守り育ててきた。大会前日に岡山空港からバスでJR倉敷駅へ。バスを降り、宿泊地の倉敷アイビースクエアへと歩いた倉敷川河畔の「美観地区」の白壁、なまこ壁と黒い本瓦、電柱が一本もない町並み。そして当日、開講式が行われた矢掛町の「矢掛本陣」周辺、現地研究会資料の表紙にもなった「備中神楽」、まさにメインテーマを文化、伝統とまちづくり、地域包括ケアとまちづくりとされた今回の趣旨を十分に感じとることができた。

研修1日目 - 5月22日(木)

〔開講式〕

前日宿泊の倉敷より西へバスで40分、旧山陽道の宿場町として栄えた矢掛町の「やかげ文化センター」に

おいて開講式が行われた。

富永芳徳・国診協会長が主催者として、「少子高齢化、経済低迷のもと、国は21世紀に相応しい社会とすべく、聖域なき構造改革を進めており、医療分野もその重点項目として改革が行われている。その一つとして診療報酬の2.7%引き下げ、高齢者医療の定率負担、健康保険本人の3割負担が実施され、医療の合理化・効率化が求められている。また、平成16年4月から医師臨床研修の必修化も始まる。国診協、国保直診はこれまで、一貫して地域包括医療の実践と地域包括ケアシステムの構築を理念として、保健・医療・福祉（介護）サービスを総合的・一体的に提供してきた。総合保健施設も本年には56施設となり地域づくりに貢献してきた。しかし、この21世紀の激動期、国保直診を取り巻く環境は市町村合併や医療制度改革などきわめて厳しくなっている。このような時期、地域で質の高い地域包括医療を実践している矢掛町国保病院と川上町医療センターで現地研修し、討論することは意義深い。ぜひ研修の成果を持ち帰り『国保直診のあり方』について考えていただきたい。全国に『あり方検討会』を立ち上げるようお願いする」と述べられ、おわりに、研究会の開催のお世話をいただいた岡山県の国保医学会と国保連合会のみなさんに敬意と感謝の意を述べ、挨拶を終えられた。

続いて、山岡治喜・矢掛町長が歓迎の挨拶として、

「矢掛町は旧山陽道の宿場町として栄え、あとでご覧いただくが、今も当時の宿所である本陣、脇本陣がともに国の重要文化財として現存する全国でも唯一の町で、また平安時代の陰陽師・安倍晴明公ゆかりの地でもある、ホテル舞う自然美豊かな風景を楽しむことのできる町である。保健・医療・福祉サービスに関しては、矢掛町国保病院を地域の中核医療機関として、公設民営によって当町が掲げる「健康で活力ある快適な町づくり」、〈備中神楽・古代—新世代文化・3世代交流〉というテーマに沿って、住民のニーズに応じてきた。また一昨日、病院改築の起工式を行ったばかりで、矢掛町におけるこれまでの取り組みを紹介できることは光栄であり、参加者のみなさんから活発なご意見、ご提言をいただきたい」と述べられた。

次いで、来賓挨拶として原勝則・厚生労働省保険局国民健康保険課長(代理・堤敏彦保健事業推進専門官)が今後の厚労省の基本方針として、財政を考えると地域を中心とした包括ケアと医療・福祉・保険行政広域化をうまく調和させることが必要であること、健康増進法が制定され「健康日本21」に基づく健康づくり・予防医療が推進されること、国としては国保ヘルスアップ事業を強力に進めること、さらに、今回の現地研究会の討議は有意義であると述べられた。また、専門官としては2日間にわたりじっくり勉強させてもらう機会を得ることができたことに感謝の意を表された。

続いて、宇都宮啓・岡山県保健福祉部長が、健康づくりは町づくり計画であり、今回のテーマは時宜を得たもので活発な討議を期待する旨の挨拶が行われた。

【概要説明】

◆矢掛町国民健康保険病院◆

原浩平院長がまず、本陣、大名行列の風景で始まり矢掛町の魅力を十分にPRされたあと病院説明に移った。矢掛町は人口1万5,600人で高齢化率29%、倉敷市に隣接し、同じ岡山県南西部保健医療圏に属している。倉敷市には第三次医療機能を有する倉敷中央病院、川崎医科大学付属病院があり、矢掛町国保病院は第二次救急医療を担う立場にある。昭和60年からは地域の高齢化を見越して、保健・医療・福祉の一体化を推し



写真1 「やかげ文化センター」で行われた開講式

進めてきた。施設としても昭和63年にトレーニングルーム、栄養指導、保健指導の機能を備えた健康管理センターを病院に隣接して新設、併せて病院のリハビリテーション科のスペースを拡充した。そして平成7年に老人保健施設「たかまつ荘」を開設、平成10年に病院2階部分を療養病棟に改築、これら3施設が渡り廊下で結ばれた。さらに、現在は2年後の新病院完成をめざしているとのことであった。

病院診療科目、設備、人員配置等の丁寧な説明のあと、理学療法科について説明があった。理学療法士は3施設すべてに配置されており、理学療法科の特別な活動として、近隣の理学療法士と看護師・ヘルパーに対象を分けたりハビリ研修会を毎年開催、毎回40~50名の参加があるとのことであった。

介護老人保健施設「たかまつ荘」(50床)の紹介のあと、健康管理センターの活動として病院の総力をあげての検診事業を紹介、とくに出前講座やウエルナビという装置を使った食生活調査、「やかげXプロジェクト」と名付けられた強い介入の運動トレーニングが中心の健康いきいき教室、盛りだくさんの健康プログラムが紹介された。

◆川上町医療センター◆

菅原英次所長から説明があった。川上町は矢掛町のさらに西北に位置し、岡山市から65km、倉敷市からでも50kmのところであり、町域の約9割が標高200~300mの高原地帯で66.7%を山林が占めている。人口は約4,000人、医療機関は民間の診療所と国保診療所

の2か所で、10km離れた隣町の成羽町国保病院(176床)とは密接な連携を行っている。

スライドは夕日と弥高山^{やたか}の雲海をバックに「川上町公営企業・川上診療所・老人保健施設ひだまり苑」のタイトルで始まり、昭和30年の診療所、昔懐かしい往診車、当時の町役場と思ったら現在もまだ役場はそのまま使っているとのこと。川上町医療センターは平成9年、ひだまり苑は平成12年に建てられ、平成13年からは公営企業化された。両施設は廊下でつながり、医療センターには一般16床、短期入所療養介護3床のほか、通所リハビリ、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、歯科診療所がある。また、川上町には入院施設がなかったために在宅診療への取り組みには十分な実績があり、在宅介護・看護実習センターを設置して年間300名の学生を受け入れている。

川上町の福祉の取り組みとして、ほかに「生活リハビリ・高齢者共同住宅しあわせ荘」等についても説明があった。

◆熊山町国民健康保険町立熊山病院◆

今回は視察時間の関係からスライドのみの研修となってしまったが、国診協の理事でもある内藤紘彦院長から、病院の概要、ミニ美術館と呼ばれるほど患者の家族、日展会友の賛同者ら寄贈のみごとな油絵で埋めつくされた廊下などの病院風景、ミニコンサートや著名な先生を招聘しての住民健康教室「健康講話」など、多彩な活動が紹介された。また、岡山大学医学部の協力を得て町役場、町立病院あげての、戦後間もなく熊

山町で起こった流行性ウイルス肝炎(3年間で416人の患者発生)の追跡調査研究、その後に慢性肝炎となった住民への指導、治療、さらに住民教育への取り組みが紹介され、町立国保病院の存在意義がはっきりと示された。

◆矢掛本陣と漫画美術館(川上町)◆

昼食後は視察研修に移ったが、矢掛町国保病院の研修には矢掛本陣の、川上町医療センターの研修には吉備川上ふれあい漫画美術館の見学がセットされていた。

矢掛本陣は「やかげ文化センター」から徒歩5分、古びた旧山陽道の面影をたどりながら移動、大名が休んだであろう畳の上で江戸の風を感じた。残念ながら田中策我筆の金屏風は修理中とかで鑑賞できなかったが、脇本陣と併せて矢掛町の歴史と文化を堪能することができた。

川上町の漫画美術館は、所蔵漫画本12万冊と全国有数の蔵書を誇り、館内には富永一朗の自筆画が所狭しと展示されていた。寝ころんで漫画を読む場所もあり、また、年に一度開かれる懸賞金付きのコンテスト優勝者の素人離れした、本当に愉快的な絵も年度ごとに飾られており、見学時間が短く感じられ、あっという間の時間であった。

どちらも町の誇る文化であり、それを大事にする人々の笑顔がうれしかった。

[施設視察研修]

昼食後、バスごと6グループ、12班に分かれて視察研修が始まった。3グループは矢掛町に残り、他の3グループは先に川上町へとバス移動。私たちは「たかまつ荘」→「矢掛病院」→「健康管理センター・健康いきいき教室」の順に視察したのち、バスで川上町に向かった。移動のバスのなかでも、NHKばりのドキュメンタリー映画『川上町山間地の在宅介護』が流され、お年寄りの本音と対する訪問看護師に感動した。居眠りする間はなかった。

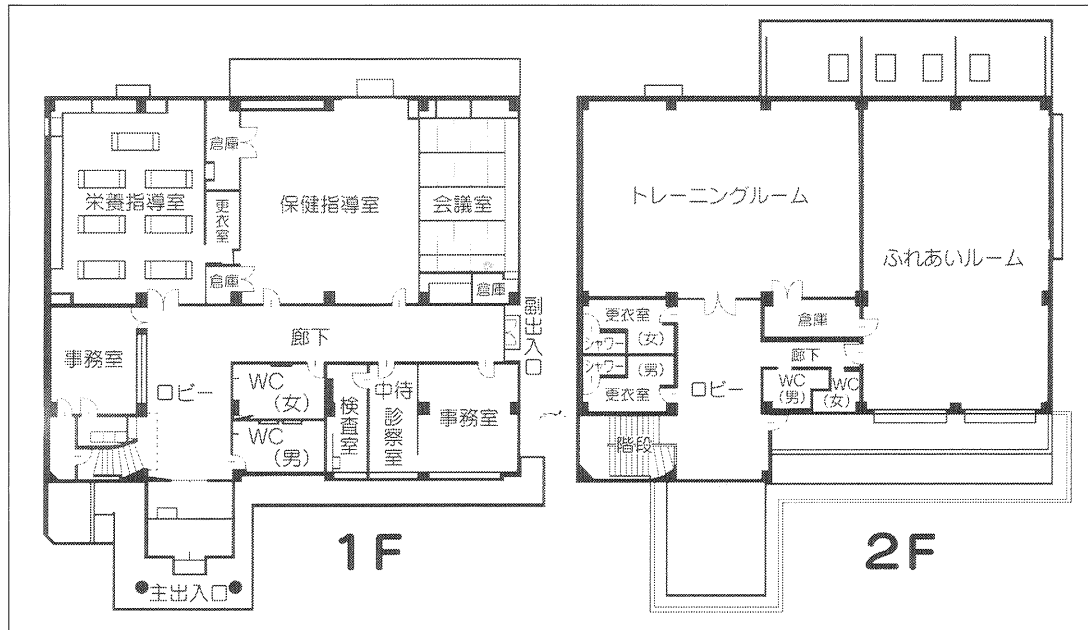
◆介護老人保健施設「たかまつ荘」◆

建物は平成7年に建てられたものだが、吉備地方の瓦屋根を模した造りで、手入れが行き届いているせいか、いまだに新しさを感じさせた。1階は広々とした



写真3 宿場町をイメージさせる「やかげ郷土美術館」

図 矢掛町健康管理センター平面図



スペースを使って、14年度から専任の理学療法士による通所リハビリ（25名）を開始しており、入所者も混じって活気にあふれていた。在宅介護支援センター、訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所など矢掛町の在宅介護のすべてが、ここを訪ねればすむようになっていた。2階は清潔感がたがよい療養室になっていて、眺めも最高のロケーションである。さらに家族宿泊室があり、遠方から来られた身内の方に泊ってもらい、入所者の世話を体験してもらっているとのことであった。

◆矢掛町国保病院◆

「たかまつ荘」から渡り廊下を経て、病院2階の療養病棟へ。健康管理センターへも病院から2階でつながっており、五色町方式が採用されていた。平成9年に改築して療養病棟58床に転換、うち介護型が16床で、さらにここからリハビリテーションセンターに直結する。リハビリ科は中国地方5県から毎年100名の参加者を集める研修会を開催するなど、この地域のトップクラスの活躍で、健康管理センターにもPTを1名配置して、保健・健康教育、在宅、医療、理学療法と地域密着型、生活密着型病院として包括的活動を行っている。3階は急性期病棟で23床休床中のため現在50床。内科・外科混合で平成8年に救急指定を受け、忙しい毎日が続く。



写真3 矢掛町健康管理センターのトレーニングルーム

各検診活動や時代にマッチした機能選択により、平成10年には累積赤字を解消し、昨年には優良自治体病院表彰を受けた。17年には大規模改築が完成し、新病院としてさらに地域密着の包括医療をめざしている。

◆矢掛健康管理センター◆

保健・健康教育、健康相談、どこでも取り組んでいる事業だけでなく、「やかげXプロジェクト」なる運動トレーニング教室、やや軟らかめの講話を中心の運動教室「7地区健康教室」や、カメラ付き携帯情報端末ウエルナビを使った食生活調査研究など盛りだくさんの先進的な活動に貪欲さを感じた。また、トレーニングルームは住民ならいつでも利用可能で、専任のトレーナーも配置しているとのことであった。

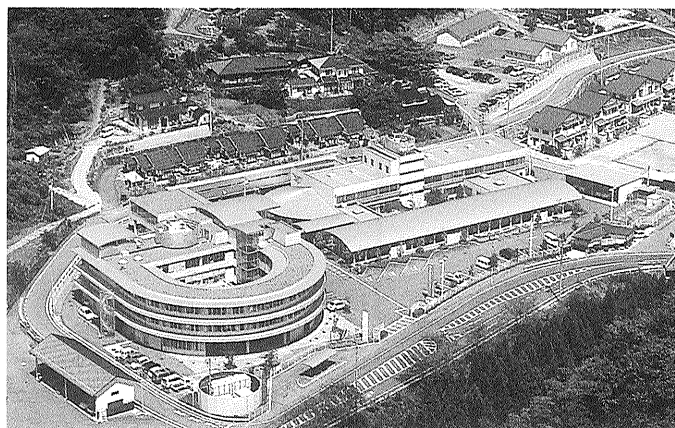


写真4 川上町医療センター全景。左の建物が「ひだまり荘」



写真5 交流会では備中神楽のアトラクションも

——バスで約40分移動・前記映画上映——

◆介護老人保健施設「ひだまり荘」◆

平成12年に医療センターに隣接して建てられた、南東に半円形のモダンな建物で、すべての療養室の採光は十分、スペースも十分、1階はレクリエーション・ルーム、機能訓練室に、外の風にいつでも触れられる中庭まである。医療センターとは2階の渡り廊下でつながり、緊急時にもすぐに対応ができる。4階が展望風呂だけのスペースになっており、眺めも最高、参加者からは経験してみたいとの声も上がっていた。

◆川上町医療センター◆

平成9年、「ひだまり荘」に先立って建てられ、医科、歯科部門を有する。とくに歯科のスペースの広さ、設備のりっぱさには驚かされた。リハビリスペースも広く、庭園もあり、戸外での歩行訓練も可能である。さらに在宅医療に深く関わり、在宅介護支援センター、訪問看護ステーション、通所リハビリに広いスペースが割かれている。

医科は毎週金曜日に、働く住民へのサービスとして夜間診療を行っている。入院は一般16床、ショートステイ3床で、通常の入院のほか短期入院してもらって自立に向けての患者指導や介護指導を行っている。また、健康福祉課、社会福祉協議会のデイサービスなどの入る総合健康支援センターと協力して、看護師、介護福祉士をめざす学生の実習センターを平成11年に開設している。

建物もりっぱであったが、在宅医療から展開してきた病院、町役場の姿勢がすばらしいと思った。

[地域医療現地研究会交流会]

視察終了後、そのままバスで移動、倉敷駅真ん前の倉敷チボリ公園内にある「アンデルセンホーム」で18時より交流会が行われた。横目でカップルをチラチラ見ながら会場に向かう途中、「遊園地で開かれる飲み会もめずらしい」と思ったのは私だけか。

内藤紘彦先生、石垣正夫・岡山県国保連合会理事長の歓迎の挨拶のあと、宮崎孝司・川上町長の乾杯で幕が開き、備中神楽の大蛇退治を見ながらグラスを傾けあい、交流会は盛会裏に終了した。

研修2日目 - 5月23日(金)

[全体討議]

朝9時より、倉敷アイビースクエア内の会議場で、1日目にも増して熱気あふれる全体討議が行われた。座長の内藤紘彦先生より、岡山県の県南の2大学病院を含む大病院が集中した地域と、県北の医師不足地域との格差について説明があり、そのなかで、知恵と努力で魅力的な町づくりに挑戦している方々に演者をお願いしたと、道上正寿・西栗倉村長、澤田弘一・上斎原村国保歯科診療所長、長安つた子・寄島町保健福祉課長、前日の22日に東京で優良病院として総務大臣表彰を受けてこられた荻野健次・吉永町国保町立病院長が紹介された。

道上村長は、「ちいさな挑戦 ちいさいからできる

face-to-faceの包括ケア」と題して村の取り組みを、行政を担う立場から語られた。西粟倉村はちょうど今年1月、幼い姉妹が遭難し悲しい話題となった村で、鳥取県に接した県最北の豪雪地帯だが、昨年、悲願の国保診療所と国保総合保健施設が社会福祉協議会に隣接して完成、いまでは保健・医療・福祉が同一敷地内で身近に連携して活動している。村ではこれまで、施設を持たないので在宅を中心に活動を進めてきた。平成元年からは保健師3名体制で活動、自治医科大学卒業の医師3、4名に医療を担当してもらっている。介護保険料は在宅中心のため月額2,700円を割り込むが、質を落とさないため住宅改修など社会政策も取り入れ、懸命に努力してきた。現在の心配は、合併により保険料が上がること、さらに、きめ細かいサービスの提供ができなくなるのではとのことであった。

やはり県最北の上斎原村の澤田所長は、歯科医の立場から生涯学習の町づくり、歯科型生涯学習に取り組んでいると語られた。「健康日本21」では歯を失うことが健康に影響を与えると書かれているが、歯周病そのものが糖尿病、誤嚥性肺炎、心疾患などに直接悪影響を与えているとの説明があった。そこで、教育により自己管理できる歯科保健モデルをめざし、中学までに徹底した飽きさせない教育プログラムを教え、全国にも広めていきたいとの意気込みで、会場は大きな感銘を受けた。

瀬戸内海に面した漁業の町・寄島町の長安課長は、大都市に挟まれた介護保険事業所が乱立する経営基盤の弱い町の保健・医療・福祉のむずかしさを述べられた。住民が町を向かないと地域包括ケアシステムを構築することのむずかしさがそこにあった。

最後に萩野院長は、地域国保医療の別のあり方に関して発表された。吉永町は人口5,200人の小さな町ながら、交通の要所にある。病院では近隣町村の患者も受け入れ、急性期を中心に総合病院外来を展開、夜間9時まで診療、土曜日診療し、日曜日にも急性期対応可能と高度機器も最高のものを導入、50床の病床もフルに回転させ二次医療を担っている。しかし、平成6年以降、毎年1億円以上の赤字を計上している。その分、急性期のリハビリ、在宅リハビリには力を入れて

いる。現在は急性期みの病院から脱却すべくデイ・ケア施設を併設し、今後はJR吉永駅のすぐ隣に透析室の拡充、総合リハビリテーションを考えたりリハビリ病棟を持つ新病院を計画しているとのことであった。県立病院が撤退する風潮のなか、地域が急性期医療を必要とするならばもう一つの公立病院のあり方であろうと思われた。

発表のあと、座長の指名でまず今井正信・国診協相談役顧問がコメント。西粟倉村の取り組みは前々から知っていたが、実はもっときめ細かくすごいものだと理解している。歯科の澤田先生の取り組みは国診協にもっと広めてほしい、長安課長、萩野院長には町の特徴を活かして頑張ってもらいたいと、各氏にねぎらいと励ましがあつた。

堤専門官からは、地域包括医療、地域包括ケアの現場を勉強させていただき感謝している。第一線のみなさんの声を活かして、10年先の事業を考え改革を推し進めていきたい。また、国保ヘルスアップ事業にも協力をお願いしたいし、メニューとしては補助事業も考えているとの言葉があつた。

最後に富永会長が、視察研修病院も含めて地域特性を活かした岡山県での取り組みに感銘を受けたと感想を述べられ、これからは市町村合併もあり、広域化に直診がどう対応していくか、また来年度から始まる新医師臨床研修制度にもぜひ取り組んでもらいたい、若い医師たちに地域医療のなんたるかを教えてほしいし、地域に残る医師を育ててほしいと結ばれた。

〔閉会式〕

次期開催の岐阜県を代表して高山哲夫・坂下町国保坂下病院長が、坂下町での現在の取り組みの一端を披露し、1年かけてみなさんを満足させられるよう準備を進めており、テーマは「市町村合併と地域包括ケアの新たな展開」とする旨、自信に満ちた挨拶があつた。そして坂本副会長が、好天にも恵まれ現地研究会が大成功であったこと、岡山県の国診協支部と国保連合会のみなさんに感謝を述べて閉会となった。

閉会後は、ほとんどの参加者が大原美術館へ、美観地区へと足を運んだあと、それぞれの家路についた。